

大刀洗町『自分ごと化会議』  
地域と障がい福祉のこれから ～住民とともに考える暮らしの課題と解決策～  
第3回 次第

日時：令和8年1月24日（土）13:00～16:00  
場所：大刀洗町役場 3階大会議室

1. 開会・事務連絡
2. 構想日本 加藤代表挨拶
3. 前回の振り返り  
○第2回会議の振り返り
4. ナビゲーターからの話題提供  
東京大学先端科学技術研究センター教授  
東京大学多様性包摂共創センター副センター長 熊谷晋一郎 氏
5. 議論  
○質疑応答等  
○テーマについての議論
6. 町長挨拶
7. 事務連絡・アンケート記入、改善提案シート記入
8. 閉会

<今後のスケジュール>

第4回会議：令和8年3月7日（土）午後1時～4時

## 第3回大刀洗町自分ごと化会議 議事概要

開催日時：令和8年1月24日（土）午後1時～

開催場所：大刀洗町役場

出席者：委員18名

### 【テーマ】

「地域と障がい者福祉のこれから～住民とともに考える暮らしの課題と解決策～」

議題：

1. 加藤代表挨拶
2. 前回の振り返りと「中間取りまとめ」の共有
3. ナビゲーター講話（東京大学先端科学技術研究センター 熊谷晋一郎教授）
4. 初参加者の自己紹介
5. 議論・意見交換
6. コーディネーターまとめ

#### 1. 加藤代表挨拶

- この会議の最大の特徴は、あえて「くじ引き（無作為）」で選ばれた住民が集まっている点にある。特定の関心を持つ層だけに偏るのではなく、多様な住民が時間をかけて対話することで、課題を「自分事」へと昇華させ、そこから真の世論を形成していくプロセスを何より重視しているため。
- 障がい者福祉というテーマについても、地球環境や増税問題と同じように、誰もがいつの間にか直面し得る自分ごとな課題になり得る。だからこそ、一部の人の問題として片付けるのではなく、コミュニティ全体の大切なテーマとして、一人ひとりが丁寧に議論を深めていくことが重要。
- 日本のハード面での設備は世界一だが、真のバリアフリーを実現するには「人が手を貸すこと」というソフト面の関わりこそが不可欠である。大刀洗町が、立派な設備に頼るだけでなく「人が手を貸すだけでいい、日本一バリアフリーな街」のモデルになることへ、強い期待を寄せている。
- 全4回の会議はあくまで通過点であり、ここで生まれた繋がりや気づきが、会議が終わった後も町の中で動き続けることを願う。

#### 2. 前回の振り返りと「中間取りまとめ」の共有（伊藤）

第1回会議では障害のある方が身近にいないという意見が多かったのに対し、第2回では発達障害のある子供を育てる親や、仕事で障がい者と接する委員などが多く参加し、議論の切り口が広がった。

前回の会議では、参加者全員がそれぞれの「苦手なこと」を共有した。これにより、「障害」を特別なこととして捉えるのではなく、誰にでもある不得手と同じ延長線上で考え、障害の有無に関わらず多様な人が混ざり合う「ごちゃませ」の状態を目指すという視点を共有した。

第1回・第2回会議での議論および委員からの改善提案シートを集約した「中間取りまとめ」の内容について報告が行われた。これまでの議論は、大きく3つのカテゴリーと6つの課題に整理された。

#### 3. ナビゲーター講話（東京大学先端科学技術研究センター 熊谷晋一郎教授）

熊谷先生より、自身の経験と研究に基づき、障害当事者の視点から「自立」や「地域社会の在り方」について以下の通り問題提起があった。

## 社会的障壁の解消に向けた具現化

- まず、障害を捉える上で重要な二つの概念がある。個人の心身に生じている機能の制約を「インペアメント」、それに対し、多数派に合わせて設計された社会環境との摩擦によって生じる不自由を「ディスアビリティ」と呼ぶ。例えば、足が動かないことはインペアメントだが、町にエレベーターがなく階段しかないことがディスアビリティを生んでいる。従来の「医学モデル」は個人のインペアメントを治そうとしたが、これからは社会の側にあるディスアビリティを、一人ひとりの特性に合わせた「合理的配慮」によって調整していく「社会モデル」への転換が重要となる。この視点に立つことで、リハビリをしてインペアメントをなくすのではなく、社会の側にミスマッチがあるという考えに移行することができる。
- 社会の仕組みが健常者向けに固定されている弊害として、深刻な健康格差の問題がある。例えば、乳がん検診のマンモグラフィなどの医療器具は、立位（立った状態）で受けることを前提に設計されており、車椅子利用者が受診できないといった現状がある。このように、医療器具自体が障がい者に適応していないために、結果として障がい者の健康寿命が短くなっている実態がある。これに対し米国などでは、「障がい者に適応する器具でなければ、公的な資金で新しく調達できない」という法的ルールが整備されつつある。日本においても、単なる配慮ではなく、器具や制度そのものを多様な身体に合わせていく構造的な改善が必要である。
- また、行政に対して「これをしてください」と要望するだけの従来の陳情スタイルではなく、当事者が抱える「言葉にならない困りごと」を、行政や専門家、地域住民が共に研究し解決策を探るプロセスが重要。これは、当事者を単なる支援の対象ではなく、自分自身の困りごとの専門家として捉える試みとなる。自分の困りごとを研究し周囲に共有する「当事者研究」は、ディスアビリティを解消する鍵となる。
- さらに、支援の在り方についても、専門家が正解を決め、当事者がそれに従う「アドヒアランス（服従）」から、当事者と専門家が対等に対話する「コンコーダンス（合意形成）」へと転換することが必要となる。これは、医師や学者が持つ専門知識だけでなく、障害と共に生きる中で当事者が培ってきた具体的な知恵や工夫である「経験知」を融合させることである。当事者が施策の企画段階から主体的に関わり、同じ悩みを持つ者同士が支え合う「ピアサポート」の仕組みを、個人の善意に留めず町の正式な制度として実装することこそが、真の「共創」の姿と捉えることができる。

## 「心理的安全性」を基盤とした地域づくり

- 障害の問題を障がい者だけのものとするのではなく、誰もが自身の弱さや困りごとを正直に言い合える「心理的安全性の高い組織・地域」こそが、結果として差別や偏見をなくす最大の解毒剤になる。「自立とは依存先を増やすことである」という定義を、町全体で共有すべき価値観として捉え、障害の有無に関わらず、誰もが多様な人や場所に頼りながら自分らしく暮らせる町づくりに期待している。その結果として高齢者や子ども、ベビーカー利用者など、すべての人にとっても安全な地域社会を実現することに繋がっていく。

## 4. 初参加者の自己紹介

今回が初参加の委員2名が自己紹介し、経験や率直な思いを発言してもらった。主な意見は以下の通り。

- 現在の職場では、発達障害のある高校卒業生を積極的に受け入れて支援する活動を行っている。社会に出てから障害のある方と接する機会が増え、健常者が障害を正しく理解することの重要性を日々感じている。
- 看護師として、生まれつきの障害がある方や、事故・病気で障害を持った方と接してきた。病院勤務の経験から、専門知識だけでは捉えきれない「当事者だからこそ知っていること」があると感じている。当事者の気持ちに本当に寄り添えているのか自問自答しており、この会議のように当事者と一緒に考えていきたい。

## 5. 議論・意見交換

熊谷先生の話題提供を受け、委員からは当事者の視点をどのように個人の行動や地域、行政ができることに落とし込んでいくかについて、意見交換が行われた。主な議論は以下の通り。

- これまで「なぜ自分や自分の子どもだけがこんなに必死に頑張らなければならないのか」と葛藤してきたが、障害は本人にあるのではなく社会の側にあるという熊谷先生の話聞いて、自分のモヤモヤは間違っていなかったことが分かり非常に救われた。
- 字が書けない子に iPad を使わせる例えが腑に落ちた。全員に同じことをさせるのが平等ではなく、その人に合った異なる配慮をすることが対等（公平）なんだと納得した。これまでは特定の人だけズルいと思われぬかという不安があったが、それが「対等なスタートラインに立つための調整」であると明確に理解できた。学校でこのような「合理的配慮」が当たり前に行われるようになれば、子供たちからみんな違って、みんなで調整し合うのが普通という感覚が育つのではないか。
- 自立とは「一人で立ち、誰にも迷惑をかけないこと」だと思い込んでいた。しかし、実際には多くのものに頼れる状態（依存先が多い状態）こそが自立であるという話は、目から鱗だった。
- ベビーカーを押している時に自動ドアではない扉を通る大変さを通じ、自立の反対は依存ではなく依存先が少ないことであるという話に納得した。
- 行政が施策をするにしても、その場に当事者が入ること（ピアサポートワーカー）の重要性を改めて感じた。行政はどこでも障がい者雇用を進めているが、その職員が持つ力の発揮の仕方として、ピアサポートの力をいろんな施策に結びつけることができるかという点が良いのではないかと感じた。
- 「弱さをオープンにできるのが心理的安全性の高い組織」という話を聞いて、障がい者に限らず、住民みんなが「助けて」と言える、あるいは弱音を吐ける環境こそが、結果として差別や偏見をなくしていくのだと感じた。
- （発達障害の子が保育園だったころ）園の発表会などで、子どもが執拗に瞬きをしたり目を伏せたりしていた行動が、実は緊張による光への過敏さだったのではないかと、これまでの経験と講話の内容が結びついた気づきを得られた。感覚過敏の子にとって、教室の反響音や照明がどれほど苦痛か。それを「わがまま」ではなく環境の不備（ディスアビリティ）として捉えられるように町全体が変わっていくと良いのではないかと感じた。
- 精神障害は外見で分からず、仲間を見つけづらいという孤独感がある。これに対し熊谷先生は、ニュージーランドなどの長期調査を例に挙げ、実は約 83% が 36 歳までに一度は何らかの精神障害を経験しているというデータを提示した。精神的な不調は、人生のどこかでほとんどの人が経験するありふれた経験であるにもかかわらず、社会がそれを「特別なもの」「隠すべきもの」として扱うディスアビリティがあるために、当事者が孤立を深めている実態が語られた。
- 作業療法士として働く中で、自分たち専門家が治してあげるという上からの目線が、かえって当事者との壁を作っていた。専門知識を一方向的に押し付けるのではなく、当事者の「こう生きたい」という思いを尊重していきたい。
- 発達障害のある方との仕事で、口頭の指示を忘れてしまうなら付箋やメールで残す、今の体調や気分をカードの色で示すといった工夫をしているが、お金をかけずに今すぐ実践できる。これは障がい者に限らず、新入社員や高齢の職員、体調の悪い人にとっても働きやすい職場づくりに直結する。
- 病院やお店の設備が整っていても、スタッフの無理解な一言で傷つき、二度と行けなくなる当事者がいる。ハード面（施設）の整備以上に、相手の特性を知り、柔軟に対応できる「ソフト面（人）」の教育こそが大刀洗町には必要ではないかと感じた。
- 過去に障害のある人と接して怖い思いをしたなどのトラウマが偏見を生んでいる場合がある。熊谷先生は、トラウマを解くには支援者としてではなく、趣味や地域の行事で「一人の人間」

として出会い直すことが必要とした。対等な関係での「成功体験」を地域を増やすことが、差別をなくす近道に繋がる。

- これまで障害の問題を自分には関係ないと遠ざけていたが、知らないからどう接していいかわからないだけだと気づいた。まずは知識をつけ、対等な関係を築くための知る努力を始めた。

#### 6. コーディネーターまとめ

- 全員を「同じ」に扱うのではなく特性に応じた「異なる配慮」を行うことで真の対等な関係が築ける。具体的な環境調整を地域のマナーとして広げることが重要。
- 行政への陳情という形から脱却し、当事者が抱える困りごとを住民や専門家と共に研究・解決する「共創」の仕組み作りが必要となっている。
- 「自立とは依存先を増やすこと」という価値観を町全体で共有し、弱さを安心してオープンにできる心理的安全性の高い地域を目指すのが良いのではないか。
- 今回の熊谷先生のお話や第3回会議の議論を踏まえ、構想日本が「提案書案」を作成。次回は、その案をもとに最終的な提言の取りまとめを行う。

次回（第4回最終回）は、3月7日（土）午後1時より、大刀洗町中央公民館大ホールにて開催予定。